日赤図書館雑誌　2009；16(1)：1-2

巻頭言

病院の図書室と患者さま用図書室

成田赤十字病院　院長
加藤　誠

病院の図書室の主たる目的は、医療者の勉強のためであり、患者さまを前にして、診断、治療そして看護の提供等医療に関することの知識の習得がほとんどだと思います。また各自が経験したことをまとめ、学会報告、論文作成のお手伝いをするのも図書室の重要な役割です。時には新聞を読みながらコーヒーでも飲んで、のんびりとした時間を過ごす場所としても利用できればよいですね。

最近は多くの病院で患者さま用図書室あるいは図書コーナーを設けていると思います。その際、病院図書室をそのまま患者さま用にも利用できるようにするには多くの困難が伴います。１つは場所の問題です。病院図書室の多くは管理棟にあり、患者さまからは見えにくく、また入りにくい場所にあります。当院でも研修棟にあり、一般の人は立ち入りお断りとなっています。そのために病院によっては、外来の一角に患者さま用図書コーナーを設けているところもあります。この場合、患者さまに分かりやすい反面、オープンスペースのために管理が難しくなります。当院では外来の一番奥、社会課の相談室の隣に患者さま用図書室「ふれあい」があります。しかしやはり外来の奥ですので分かりにくいという欠点があります。また時間の問題もあります。病院図書室は24時間利用できるように工夫されていると思います。夜しか文献を調べる時間のない研修医等の利便性を考えるとき、夜間も利用できるようにしておかなければなりません。これに対し、患者さま用図書室は管理の関係から日中、しかも外来時間のみ等の制約が付いているところが多いのではないでしょうか。

患者さま用図書室の目的は、医療者用とは異なります。１つは入院中の空いた時間を過ごすための小説やエッセイなどの貸し出しです。当院ではこのために以前から、看護学生が「移動図書館」と称して、本を持って病棟を回り、本の貸し出しをしておりました。もう１つの目的は、患者さまご自身が自分の病気についての知識を得るためです。そのためには、病気に関する本、病気の体験談などが揃えられていますが、現在ではインターネットを利用して調べることが多くなりました。やはり自分自身の問題となりますとみなさん真剣にパソコンに食い入っておられます。これからの医療は、以前のようなパターナリズムではなく、医療者と患者さまとが一緒になって病気に取り組んでいく姿勢が必要です。あくまでも病気を治し、ときには長く病気と（場合によっては一生）付き合うのは患者さま本人です。私達医療者はそのお手伝いをすることであり、患者さまが一生病気と付き合わなければならない場合は、医療者は患者さ

KATO　Makoto
成田赤十字病院　院長

まに寄り添い、患者さまを支え、患者さまと共に歩む視点が重要です。そしてこのような場合の図書室の役割としては、患者さまご自身が歩まれるための知識の提供と同時に、時には、安らぎの場としてご利用していただければよいのではないでしょうか。

時代と共にそれぞれの役割が変わります。病院図書室もその時代にあった役割をする必要があるでしょう。これからのみなさまのご活躍を期待しております。